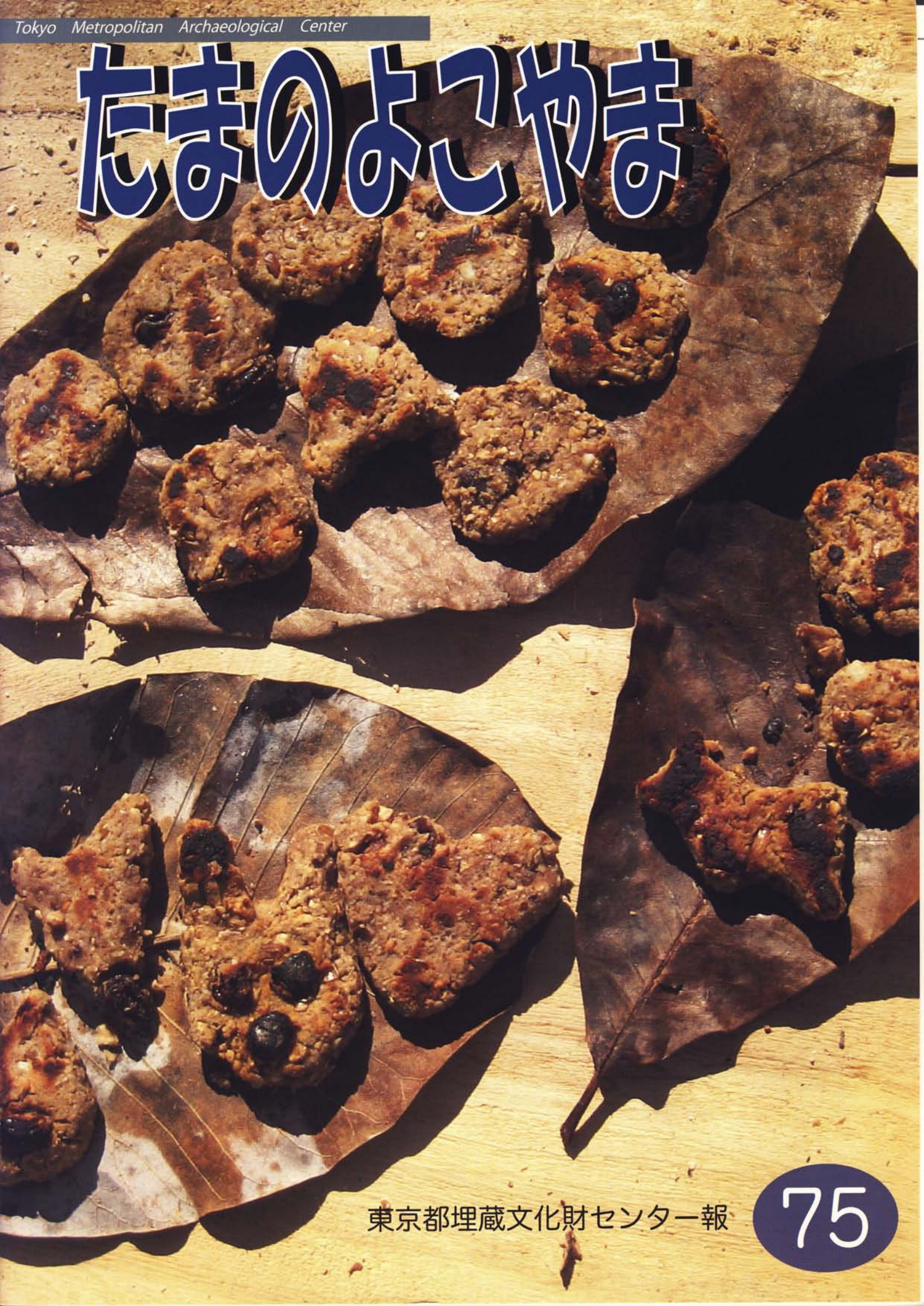


たまのよこやま



前回は調査で検出された遺構について説明しましたが、今回は調査後の整理作業で見つかった遺物を中心に見ていきます。

出土した遺物は、調査された遺構と同じ時期のものほかに、縄文時代草創期(約12,000年前)から近代まで断続的に様々な遺物が見られましたが、今回は縄文時代中期と弥生時代末から奈良・平安時代を中心に遺物を紹介します。

縄文時代中期は、生活用具としての土器や石器とほかに、装身具や祭祀などに使われたと思われるミニチュア土器などの土製品類が見つかりました。

土器は、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期から中葉の勝坂式期までが主体で、竪穴住居跡の営まれた時期にほぼ主体があるようです。五領ヶ台式期の住居跡からは、東信州の大石式土器や東関東の竹ノ下式土器が混ざって見られる時期。その後の猪沢式期、阿玉台式期、勝坂式期などの土器群が見られました。

土器は、深鉢形土器を主体に、浅鉢形土器や小形土器がありました。土製品は、ミニチュア土器や耳

栓、土錘、土製円盤などと土偶があり、土偶は頭や胴体、足だけと、元の形がわからないほど破損したものが、お墓や土坑などからだけでなく、土偶より新しい時期の住居が埋まる途中で、他の土器や石器などと混ざって出土しています。

石器は、石鏃、石匙、打製や磨製の石斧、礫器、加工礫、石器を作る時や壊れた時に剥片(石屑)などがあります。石鏃や打製石斧、磨製石斧には製作途中と思われるものがあり、遺跡の中で石器が作られていたことがわかります。また、打製石斧や礫器の中には、石皿や磨石の大形破片を再加工したり、焼けた礫を加工して作り直したものの、短く使えなくなるまで刃を作り直した打製や磨製の石斧、壊れ石器を別の用途に転用した礫器。逆に壊れて使えなくなって集石に利用されたものがありました。

これらの遺物から、住居跡や土坑など村の使われ方や変遷がたどれるようになり、縄文人の生活の様子と貴重な資源の利用法や工夫の跡を垣間見ることができるようになります。



縄文時代中期初頭の土器



縄文時代中期中葉の土器



縄文時代の土製品と装身具



縄文時代の石器



弥生時代末期から古墳時代初頭の土器



古墳時代後期の土師器



鉄鎌（上）と鉄製の鋤先（下）



古墳時代の土製品と管玉

今回の中田遺跡の調査では、弥生時代から奈良・平安時代の竪穴住居を22軒調査しました。それらの竪穴住居を中心に、土器や石器、鉄製品、土製品、石製品など多彩な遺物が出土しています。破片を含めた出土遺物の総点数は、実に7,500点を超えています。

弥生時代末期から古墳時代初頭の遺物としては、高杯、鉢、壺、台杯甕などの土器が出土しています。しかし、発見された遺構も多くなく、土器以外の遺物は、土製品や石器がごく少量発見されたにとどまっています。

最も多くの出土遺物に恵まれたのが、古墳時代後期です。中田遺跡のムラ（集落）が最も栄えた時期にあたり、多種多彩な遺物の出土が見られました。特に、素焼きの土器である土師器は、出土遺物の大半を占めています。盛り付ける杯や椀、高杯、鉢、煮炊き用の大小の甕、蒸すのに使った甑など、見ていだけでも当時の生活が偲ばれます。土師器を観察すると、ヘラ状の工具で削ったり、ナデ調整で器面を整えたり、ミガキを加えて仕上げています。赤く彩られた土師器もみられ、伝統に培われた様々な知恵を集めて土器作りを行ったことがわかります。

また、ごくわずかですが、窯を用いて1,200度くらいの高温で焼いた須恵器も出土しています。東海地方か近畿地方から運ばれてきたのでしょう。

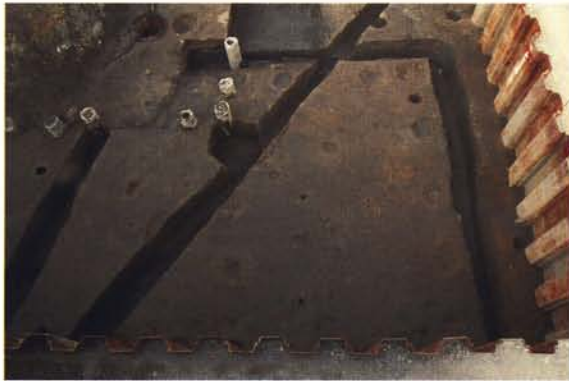
土器の他の生活用具としては、台石や石皿、磨石、編み物石などの石器が見られます。編み物石は棒状の河原石を用いており、まとまった量が出土しています。

古墳時代の鉄製品には、鋤先、鉄鎌、穂積具があります。写真に示したU字形の鋤先は、ほぼ完存する小型の優品です。大型の竪穴住居から出土しており、所有のあり方も注目されます。

土製品としては、勾玉、管玉、紡錘車、土製鏡、土玉などが出土しています。人の頭部を真似て作ったような土製品も見られました。カマドで用いる支脚も土製で製作されていました。また、石製の管玉も出土しており、深緑色を呈しています。

3軒検出された奈良・平安時代の竪穴住居からは、土師器、須恵器、鉄鎌が出土しています。奈良時代の竪穴住居から出土した鉄鎌は、ほぼ完形で遺存状態も良好な製品です。

（小坂井 孝修・鶴間 正昭）



1. 遺構全体



2. 遺構コーナー一部



3. 瓦積み (その1)



4. 瓦積み (その2)



5. 瓦積み (その3)

港区 No.149 遺跡は環状二号線建設工事にともなって発見された遺跡です。そのうち第35地点は2006年度に調査されました。現在は調査報告書作成のための整理作業が進められています。

この地点は、中世まで「日比谷の入り江」と呼ばれていた低湿地を埋め立てた造成地の上に位置していますが、寛永9（1632）年の「武州豊嶋郡江戸庄図」に「本堂伊勢」との記載がありますから、江戸時代の初め頃にはすでに常陸国新治郡志筑を本拠地とする本堂家の屋敷があったことが分かります。そして、この状態は幕末にいたるまで変わることがありませんでした。本堂家は慶長6（1601）年の時点で8500石の「交代寄合」（有力旗本）であり、その後正保2（1645）年に8000石になりますが（弟に500石を分知）、慶応4（1868）年には1万110石の大名となりました（志筑藩成立）。

第35地点からは多くの江戸時代の遺構や遺物が見つっていますが、今回紹介する遺構は、17世紀中頃の地層面から検出された建物の基壇と考えられるやや興味深い遺構です。いくつかの柱穴をとともな^{なまこがわら}った短辺8m、長辺12m程の基壇で、周囲には^{かべがわら}海鼠瓦（壁瓦）が3段に積まれて廻^{まわ}っていました（写

真1・2）。瓦の積み方は、1段目と2段目は両者の辺がピッタリと合ったズレのない状態でしたが、3段目の瓦の積み方は場所によって、3段目もおおむね2段目の上に乗っている箇所（写真3）、3段目が2段目の内側にある箇所（写真4）、3段目が2段目の外側に設置されている箇所（写真5）の3パターンが認められました。

特に重要なのは、3段目の瓦が2段目の瓦の外側に位置する例で、このままだと3段目の瓦は落ちてしまいます。それを防ぐためには2段目までをあらかじめ地中に埋めておく必要があります。たぶん3段目の瓦も頭が露出していただけで地中に埋っていたと考えられますが、いずれにせよ、写真1に見える遺構周囲の溝は、遺構が機能している時点では埋められており、瓦を見ることはできません。

見せるでもなく、かといって、基壇を補強しているとも思われず、さらに基壇を区画する意図なら3段目の瓦だけを頭を出して埋めれば良いわけです。わざわざ3段もの瓦を埋めるために溝を掘り、その溝を時をおかずに埋め戻している。いったい、この3段に積まれた瓦は、どのような働きをし、何を意味していたのでしょうか。（福田 敏一・武井 利道）



遺跡近景

今 から30年前の1978年、当時はまだ東京都埋蔵文化財センターは設立されておらず、多摩ニュータウン地域の発掘調査は多摩ニュータウン遺跡調査会によって行なわれていました。この年に就職した私が、最初に配属された遺跡が多摩ニュータウンNo.556遺跡でした。

多摩ニュータウン地域には、964カ所もの遺跡が見つかったわけですが、当時、多くの遺跡が発見されつつあるこの地域の遺跡調査を、開発との兼ね合いから、どのように実施して行くかということが、大きな課題となっていました。こうした中で組織を充実して遺跡調査に対応する最初の段階で、

多摩ニュータウンNo.556遺跡の発掘調査が行なわれました。

No.556遺跡は現在の南大沢駅近くにありました。当時、京王線は多摩センターが終点で、南大沢まで開通するのはこれから10年後となります。またニュータウン通りもまだ出来ていません。したがって、事務所のあった多摩市からは、野猿街道を経て南大沢に通っていました。

No.556遺跡は、丘陵から流れ出る小さな河川が開析した谷戸の、日当たりの良い斜面地にあり、古墳時代終末期の竪穴住居跡3棟、奈良時代の竪穴住居跡3

棟などを検出しました。また当時、多摩ニュータウン地域内では弥生時代の遺構・遺物はほとんど見つかっていませんでしたが、このNo.556遺跡からは弥生時代中期の甕形土器がほぼ完形で出土しました。

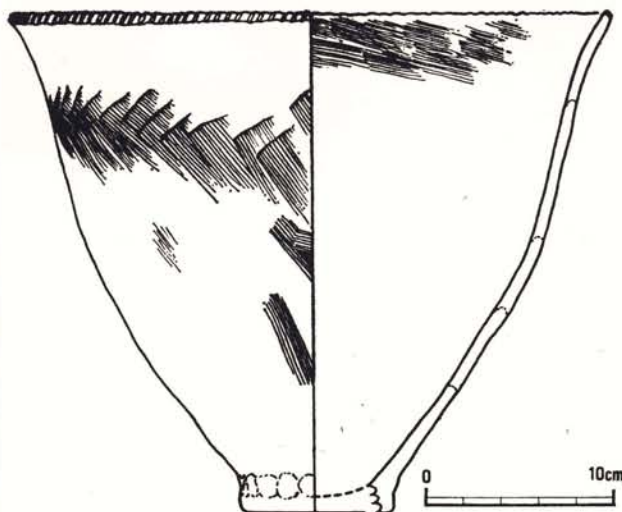
これ以後、多摩ニュータウン地域の調査が進み、No.556遺跡を含むニュータウン地域西寄りのエリアでは、弥生時代の集落遺跡も見つかるようになりましたが、このようなことが

分かったのはNo.556遺跡の調査後、十数年を経た後のこととなります。No.556遺跡の発掘調査報告書は東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集に収録されています。

(栗城 譲一)

1 / 964

多摩ニュータウンNo.556遺跡



弥生時代中期の土器（甕）と実測図

石器の「ツボ」 Vol. 1

「石器」がよくわからない理由

「石器は土器に比べてよくわからない」「おもしろくない」というご意見を聞くことがあります。もっともなことだと思います。土器に限らず壺や皿は工芸品・美術品として鑑賞されます。一方で、包丁やナイフなどの「刃物」は熱心な収集家はいますが、だれもが鑑賞を楽しむというものではありません。石器のほとんどは切ったり削ったりする「刃物」ですので、石器が土器に比べて分が悪いのは当然です。

ところで、「おもしろい」土器と「よくわからない」石器の違いは何なのでしょう。土器は壺や皿などの「器」、石器は「刃物など」と役割が異なりますが、それだけではありません。

大きな違いは「可塑性」というものです。土器は粘土をこねて作ります。こねている途中で失敗しても最初から作りなおして、思いどおりの形に仕上げることができます。それを「可塑性」といい、この性質のために規格品を作ること、意匠を凝らした独創的な芸術品を作ることができます。



土器づくり体験（粘土をこねて積み上げている）

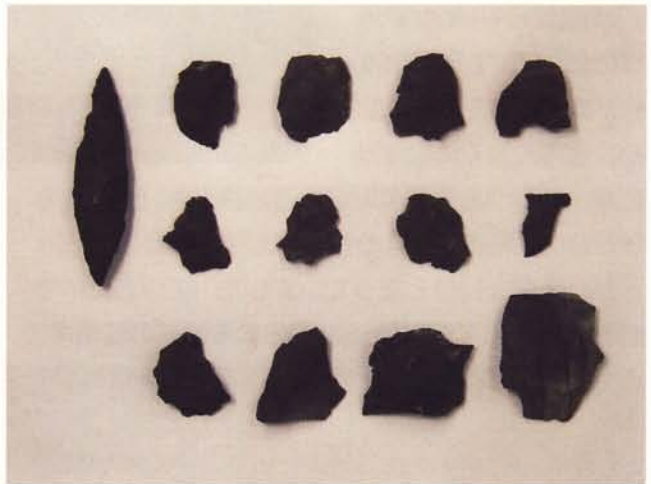
一方、石器は石を打ち欠きながら作ります。一度打ち欠いたら元に戻すことはできません。したがって、石器時代人は、失敗したところを修整して何とかうまく仕上げることに苦心します。これには相当の技術がいりますが、そのため同じものを作ることが不向きで、意匠を凝ることもできません。同じ種類の石器でも、大きかったり小さかったり、厚かったり薄かったりするの、色いろな大きさの石から



石器の接合 左：正面、右：右側面
（打ち欠いた石片を集めて元の石に復元したもの）

失敗を乗り越えて何とか作り上げた証です。

それが理由の全てだとは申しませんが、粘土と石という素材の性質の違いが、石器が「よくわからない」原因ということができます。



槍先形尖頭器（石槍 左）と
打ち欠いた時に剥がれた石片

さて、今回はじまりました『石器の「つぼ」』は、「なんだかよくわからない」石器を良くわかっていただく、興味をもっていただくために、石器観察・鑑賞の「つぼ」をお伝えしようと企画しました。私は、現在府中市武蔵台遺跡という旧石器時代と縄文時代の遺跡の調査を行っています。次回以降は、主にその出土石器を題材にしながら、旧石器時代と縄文時代の、数々の種類の石器を順々に紹介していきたいと思います。
(伊藤 健)

くろがね物語 十五

埋もれた調度品

昨年度、府中消防署の新築工事に伴い武蔵国府関連遺跡の調査が行われ、平安時代の小型八花鏡をはじめ貴重な遺物が発見されました。その中に、古代の家具（調度品）に付属する金具があります（図1）。左の金具は、頭部が六角形の長さ2.3cmの金銅製鉸で、家具などの装飾品と考えられます。中央の金具は壺金具と呼ばれるもので、手箱などの蓋や身に鍵（錠前）を取り付けるための環状の金具です。また、右の壺金具は雲形に丁寧に加工した座金を伴うもので、おそらく、櫃（収納箱で後世の長持）や厨子（身近な物をしまふ筆筒）の正面に取り付け施錠するための装飾金具です。

これらの金具は、竪穴建物跡や掘立柱建物跡から見つかっていますが、正倉院に納められた古櫃（図2）に見られるものと同じもので、武蔵国府の集落内においても同様の調度品が持ち込まれたものと思われる。平安時代には、庶民の間にも大事な宝物を納め、施錠する習慣があったのかもしれませんが。あるいは、調査地内から漆容器なども出土していることから、家具類を修理・製作する職業に従事する人々が暮らしていた可能性もあるで



図1 武蔵国府関連遺跡出土の金銅製鉸・鉄製壺金具



図2 正倉院所蔵の古櫃（『日本の美術』No. 193より）
しょう。武蔵国府周辺が「マチ」として賑わい、市場では、中古の家具などが売買されていた光景が浮かんできます。ほんの小さな金具でも、当時の人々の生活を復元するうえで、重要な資料となります。（松崎）

保存科学室 だより 6

— 火災被災出土品の修復 その1 —

平成17年10月8日未明、国分寺市遺跡調査会の調査事務所が放火に遭うという、とても残念な事件がありました。消防の懸命な消火活動に関わらず、国史跡『武蔵国分寺』から出土した奈良・平安時代の瓦を主体とする出土品のうち、約1,200箱も被災してしまったのです。

瓦や土器は、もともと粘土を高熱で焼いて造るものですから、火災によって燃え尽きてしまうことはありません。しかし、現在出土品の収納に最も多く



火災で融けたコンテナ

用いられているプラスチック（樹脂）製のコンテナは、200℃程度の低い熱でも飴のように融けてしまい、煤と一緒に表面に付



汚染除去実験の一例

着・浸潤することで、資料を著しく汚染してしまうのです。一度染み込んだ樹脂は、資料を傷めずに剥がすことも、薬で溶かすことも困難で、他県における過去の火災例においても、この汚れから出土品を救済することが大きな難題となっていました。

そこで国分寺市は、出土品を復旧するための専門家委員会を組織しました。当センターも、委員としてこれに参加し、修復方法について検討を重ねた結果、ほぼ被災前に近い状態に戻すことに成功したのです。

この成果に基づき、国分寺市の委託を受けた当センターでは、昨年度から5カ年の予定で被災出土品の修復事業を行っています。（長佐古）

新シリーズ始まる!!

「1/964」(964分の1)

964箇所の遺跡が発見された多摩ニュータウン遺跡群。遺跡の調査が始まって40年を経た今、ひとつひとつの遺跡にスポットをあて、それぞれの遺跡調査に携わった調査員が、回顧録を織り交ぜて紹介します。

「石器のツボ」

縄文土器などに比べ、面白味に欠け、いまひとつ人気のない石器。どうして面白くないのか、どうして人気薄なのか、初回に分かりやすく説明し、次回からは「石器のおもしろさ」をシリーズで紹介していきます。

遺跡庭園「縄文の村」から

先日、毎年恒例となっている秋の味覚拾い(木の実の採集)をしました。と言っても、行事になっているわけではなく、空いた時間を利用して、少人数でひっそりと拾っています。

コナラやクヌギ、オニグルミ、カヤの実など数種類をいっしょに拾い、洗浄、選別、乾燥する作業を行います。オニグルミの乾燥をしていた時のこと、とても面白いものを見つけました。

通常、オニグルミの殻は同じような殻が二つ合わさって出来ていますが、3分割のものや4分割のものもあることが分かりました。さらには双子のものまで見つけて、「これは滅多に見られるものではない」ということで、ここにご紹介します。

ちなみに、遺跡庭園には17本のオニグルミがあります。



通常のもの



3分割のもの



4分割のもの



双子のもの

東京都埋蔵文化財センター 2008年度遺跡発掘調査発表会

発表遺跡

八王子市 No.1029 遺跡	縄文時代・中世	及川 良彦
北区 西ヶ原貝塚	縄文時代	西澤 明
文京区 千駄木三丁目北遺跡	古墳時代・近世	武笠 多恵子
八王子市 櫛谷遺跡	中世～近世	田中 純男

日時
平成21年3月20日(土) 13時～16時
会場
当センター会議室

縄文アクセサリ作り教室

平成21年1月24日(土)
9時30分～11時30分
平成21年3月27日(金)
午前の部 9時30分～11時30分
午後の部 13時30分～15時30分

文化財講演会・講座のご案内

文化財講演会

第5回の講師を変更しました。

- 第4回 平成21年1月21日(水)
「縄文人の利き手は？」 阿部 朝衛 氏
第5回 平成21年2月21日(土)
「縄文人と墓」 西澤 明

文化財講座 / TAMA 市民大学講座

東京都埋蔵文化財センター・多摩市教育委員会共同事業

- 第3回 平成20年12月9日(火)
「古墳からみた多磨のなりたち—
6～7世紀を中心として— 松崎 元樹
第4回 平成20年12月10日(水)
「古代南武蔵の役所とムラ」 江口 桂 氏
《講演会・講座の開始時間は午後1時30分からです。》

【表紙の写真】～縄文クッキー～

当センターでは、縄文食体験教室を行っており、メニューのなかでも人気は、縄文クッキーです。思ったよりも栄養価の高いものを食べていたことに参加者の皆さんは一様に驚かれます。

センターの体験コーナーに「縄文クッキーレシピ」をいつも置いています。どうぞ、ご利用ください。



たまのよこやま 75

東京都埋蔵文化財センター

2008年11月25日発行

〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>